

『東方』二五九号より

## バイオ学者がみた

## 「中国少数民族」

田辺義明（社会学者）

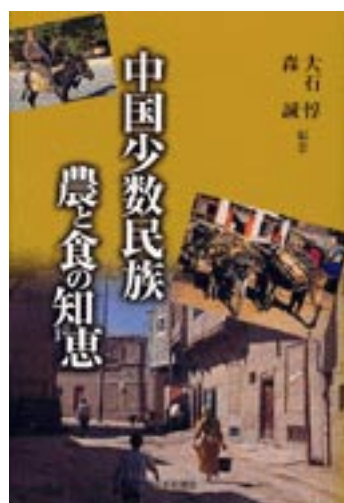
### 意地ワルな批評

はじめて本書を手にしたとき、評者はなにやら因縁めいたものを感じてしまった。静岡大学農学部は創立五十周年記念事業の一環として、中国少数民族地域を対象とした大規模な研究プロジェクトを発足させたという。その前に因縁というのは私事からで、評者は社会学を専攻している日本人であるが、新疆ウイグル自治区の生産建設兵団農業第八師団の退職幹部を「岳父」（漢族）として——つまりは身内が西域の少数民族地域に居住しているという事情がある。ウイグル族など新疆における少数民族は、西藏（チベット）とともにその現地においては「多数派」で地域人口の過半数を占める。評者も例年の「探親（帰省）」では否応なく、少数民族と呼ばれる彼らの生活文化と身近に接することになる。そのような脈絡からは、日本人学者一般の観察眼を「瞥見」と、つい決め付けてしまいがちである。この書物への批評もやや意地ワルなものになってしまいかも知れない。そこはどうか許されたい。

大石惇・森誠編著

『中国少数民族 農と食の知恵』

明石書店・四六判・二四八頁・二一、〇〇〇円（税別）



### 大プロジェクトの意義

静岡大学農学部の学術活動として具体的には、十数回の調査隊派遣から始まり、いまでは新疆伊犁地区に「中日共同有用植物資源圃」を建設して、野生リンゴの原種を保護しているという。それは遺伝子「DNA」配列の保存と研究だけに、まさに先端科学として日本の「バイオテクノロジー」が駆使されているようだ。農学部はいま世間の「バイオ」ブームで注目されている。しかし国立大学であるとはいえ、日本の地方大学の一農学部で、この大事業を達成しつつあるのには驚きすら抱く。一方中国では周知のように、江沢民政権によって「西部大開発」が叫ばれており、開発の手は新疆ばかりか、西藏・雲南など他の少数民族地域にも及んでいるという今日の背景がある。そこでの開発には工業化を急ぐだけではなく、より基盤的な「農業開拓」も政策課題となる。ここに社会的要求と、先端的バイオ技術の符合性が見えて来る。

また本書まえがきでは、静岡大学の中井弘和副学長が

▼『東方』259号より  
一 バイオ学者がみた「中国少数民族」  
▲ 田辺 義明

「民俗学的」という表現を使っている。人文社会科学の分野では「民俗学」と「民族学」は、明確に峻別される。漢語では紛らわしいが、外来語では前者が「フォークロア」、他方は「エスノロジー」である。従前これらの領域を扱って来た「文化人類学」と「社会学」、その実情に触れよう。日本を含む西欧においては六十年代以降、C・レヴィー・ストロースの「構造主義」的文化人類学の台頭や、A・シュツツの「現象学」的社会学の再生など、パラダイム革新が試みられた。当初は「科学のルネッサンス到来」と呼ぶ人もいたが、しかしどちらの分野でも、いまだに「方法論」を巡つての論争を反復している。現在では応用研究以前の段階で、あたかも「凍結路面のスピン」に陥ってしまった自動車のように、これらの研究は「手段の目的化」という客観的批判を招いてしかるべきである。

中国ではとくに、分野を問わず「科学」に要求されているのは、方法論ではなく「結果」である。そこに学者の果たす役割があり「時代によつて採点される」のだという。中国の学問に固有の「プラグマティズム(実利主義)」については、國務院のシンクタンクである中国社会科学院において、評者が一年間の滞在研究をした際に、身に染みて体得したものである。ここでは「社会人類学(英国流の文化人類学・社会学の別称)」で著名な費孝通博士らの農村調査を跡付けたのであるが、さきの「採点」の表現は、博士の言葉から借りた。世の学者による経験的考察一般について「実証研究」という呼称をあえて用いるが、その「実証」という形容詞がなぜに付されるのか? 科学は実証されてこそ真の学問たりうるという実例が本書にもある。ここに至るまで著者一同の熱気を感じてしまう。

▶ トップページにもどる

## 評者の知る辺境

農事といえば、家族に「綿花」の摘み取り作業について体験談を聞いた。身分は「工人(都市労働者)」であつても、八十年代初期までは「民工」という使役があつたのだ(いまでは「民工」とは季節的または移動的な労働力を指すようだ)。朝は日の出まえから、腰に麻袋を下げて綿を摘む。ちなみに西域の日の出は午前八時すぎとなることもある。その姿は、南北戦争以前のアメリカ黒人労働者を彷彿させる。新疆の自然条件は厳しい。ところによつては記録上の最高気温が摂氏五十度、最低がマイナス五十度近くという信じがたいほどの数値がある。日の出まえ綿花がまだ朝露を含まないうちに収穫するのが、作業を軽くするコツであるという。その時代はこのような作業によつて「糧票(配給切符)」がもらえた。

新疆開拓地の前線には「生産建設兵团」の移民(漢族)が多く配置されている。この新疆生産建設兵团について本書では、川井陽子氏が「屯田兵」と表現しているが、ある意味でそれは正しい。しかしそれが実際に軍事力なのか、という点では川井氏は詳述を避けている。評者が知るところでは、ある農業師団は、山海関の解放軍教導師団がまるごと転進したということである。その出発では軍隊であるが、いま現地で目立つのは「兵团保険公司」・「兵团タクシー」などという直営企業の看板である。評者の岳父は黨員で、兵团傘下の「綿実油工廠」支配人であつたが軍人ではない。このことから、それは生産活動と行政機能が合致した中国式の「集団」組織であり、とうぜんに自給的・経営的農業を含む経済社会的諸機能を担っているのである。また「辺防部隊(国境警備隊)」としての「人民武装警察隊」の駐屯地(分屯地)は別個の各所にあつて、かつ

ては開拓民が主力の基幹兵力とされた時期もあったが、現在その軍事色は薄いと見えるであろう。

ニーダム？ インディー・ジョーンズ？

雲をつかむような中国辺境の民族文化研究に「体当たり」の考察をした先端的バイオ学者たちの勇氣に、評者は感服せざるを得ない。ここに至っては方法論が云々という問題ではなく、すでに著者一同は現地に両足を着けたのである。それは中国をフィールドに活躍し、先年他界した英国の自然科学者J・ニーダムの研究姿勢にも比肩するものである。なお蛇足であるが、ニーダム、また費孝通博士については、日本の『新社会学辞典』（有斐閣、一九九三年）で評者が人名項目を担当している。ここに因縁はさらに深まったようだ。

ともかく伝統に裏打ちされた農業技術や、土着の食生活の実際については、本書を手にとつてその記事と、豊富な写真をご覧いただく以外に紹介の手段がない。不毛に思える茫漠とした荒野が、学問に豊穰な実りをもたらしたようだ。農学部教官・卒業生・在学生からなる六十名以上の調査隊員の「足」と「胃袋」が証人である。ただ「食」については、評者が新疆で口にする民族料理で、イスラム教を信仰する彼らが常食とするメニューがとくに印象的である。マルコ・ポーロが南欧に伝えたのかどうかは知らないが、スパゲッティは「拌麵」に、ピザパイは「饅（ナン）」に、ピラフやパエリアは「抓飯」にその原型を残しているらしい。もちろんここでは豚肉はタブーである。また鶏は卵の生産力、牛はもつばら動力源で、消去法からして食するのはラムやマトン（羊肉）となっている。これら家畜については、編者でもある森誠氏はもともと畜産学者であ

▶ トップページにもどる

り、その方面の記述が詳しい。また現地市場で蔬菜類が多種多彩であることについて、卒業生の説明では「品種改良が進んでいない」とあるが、それらは第一義的に「商品」としては生産されておらず、QC（品質管理）が行われていないためと評者は見ている。著者らは「食べる」行為すら、すなわち研究となるのであり、その点では評者など現地でも「徒食」を重ねるだけである。本書の説明は深く鍋料理の具にまで及ぶが、ただ中華料理全般の由来を、これら地域の少数民族に求めるのには無理があるのではないか。また仔細な調査紀行は意義深い、これだけによると首都北京での資料蒐集や確認作業が行われていないらしい。現地へのショートカットは手近ではあるが、相手は中央集権国家であるだけに、また段取りの慎重さも必要である。あたかも十九世紀までの探検隊のごとく、宝物を探して辺境に行くことには「ロマン」がある一方で、ときとして「迷い道」もある。ここに「悉皆（しつかい）」または「網羅」を求め、さらにそれを「一般理論化」とするという、人文社会科学の常道である「収斂」の法則とは相容れない側面も指摘しなければならない。いまの中国に「インディー・ジョーンズ」（探検映画ヒット・シリーズの主人公で架空の大学教授。中国もその物語の舞台となった）のような学者が入り込む余地はない。

#### ユニークな研究書

日本で出版されている中国少数民族関連の書物は数多いが、評者は国家政府の少数民族政策に関する加々美光行『知られざる祈り』（新評論、一九九二年）、巨大都市における少数民族についての李天国『北京の新疆村』（ハーベス社、一九九六年）、そして「新疆」（『中国地理紀行』五号、

- ▼ 『東方』259号より  
四 バイオ学者がみた「中国少数民族」  
▲ 田辺 義明

二〇〇二年五月）と並んで、その筆頭にこの本書を諸姉諸兄にお勧めしたい。じつにユニークな「少数民族」文化の研究書である。バイオ学者の観察眼はこのように鋭かったのか。ともかく取り上げている事項が興味深い。生活のおいをこれほど感じさせる作品は稀である。先端的バイオ農学はともかくも、農事一般を知らずして農村地域の調査研究が可能と考える日本の社会学者には、この書物は漢方の「お灸」として効きそうだ。

[トップページにもどる](#)

[今月の『東方』](#)

[書評目次へ](#)